

## 「いのちのつながり」

郡上市 福常寺 可児 優

あるご門徒さんの法事に参らせて頂いた時のお話です。お宅に到着し、客間でお茶を頂いていると今日の為にお集まりになった親族の方が廊下を通過して、次々とお内仏の方へ歩いて行かれる様子が見えました。私はその数の多さに驚きました。田舎の仏間は広いとは言え、とても収まりそうにはありません。結局、廊下にまで親族の方が一杯になりました。その後の食事の席である一人の方が私に「義理で集まった訳じゃない。こんだけ集まるのもお互いがお互いを思っとるからや。」そうお話しして下さいました。

最近では家庭の形も変化し、核家族が増えています。親戚付き合いも昔と比べると減り、その関係というのは稀薄になっているように思います。これは家族という集団だけではなく、すべての人間関係において言えることではないでしょうか。極端なことを言えば人との関わりが個と個のつながりでしかなくなってきたように思います。この個というものを突き詰めますと自我ということになります。自我に生きる、私だけの思いで生きるということは、もしかしたら自由で楽なのかもしれません。逆に自分以外の人と関わり合いながら生きるというのは、時には煩わしいこと、面倒なこともあるでしょう。しかし我々は決して一人では生きていけません。私が今ここに在るという事実は、私以外の他のいのちとの関わりを抜きにしてはないのだと私は思います。それは私を生んで下さった親、育ててくれた親ということをお返しすれば一目瞭然です。また親しい友人も含め「あの人は私にとってかけがえのない存在だなぁ。」そう思える事実が互いに関わりあって生きているいのちの事実を示しているのだと思います。

『歎異抄』には「一切の有情は みなもって世々生々の父母兄弟なり」という言葉があります。一切の有情ですから人に限らず、いのちあるものは全て関わりあって生きているということです。好きな人も嫌いな人も、動物も虫も草木もみんな実は深いところでいのちが繋がっているということです。人間以外と言うとなかなか実感しにくい言葉ですが、私たちは他のいのちを頂かないと生きていけません。時にはいのちを頂き、いのちと共感し支え合い生きているのです。また我々のご先祖様も同じように様々ないのちと関わってきたのでしょう。そういった感覚の元、改めて私が授かったいのちというものを受け止める時、そこには限らない歴史があったということに気付かされます。この私のいのちが綿々と受け継がれてきたところには、いのちあるもの全て(=有情)の関わりがあった。そういった私たちの想像を超えた世界をいのちの繋がりの中で感じる事が出来るのではないのでしょうか。

どのようにして今の私のいのちが成り立っているのか。そのようなことは普段の生活の中であまり考えることはありませんが、今回の法事を通じて改めて考えさせられたことです。